



# ふくりゅう

特定非営利活動法人  
日本下水道文化研究会会報

発行責任者 酒井彰(運営委員会代表)

平成18年3月25日  
通巻46号

## W. K. バルトン生誕150年記念・記念講演会のお知らせ

William Kinnimond Burton は「日本の公衆衛生の父」と言われておりますが、専門分野のみならず写真の大家として、また浅草に建造されました日本最初の高層建築「凌雲閣」(浅草十二階)の設計者でもあります。バルトンは帝国大学で衛生工学の教師を務める一方で、国内24都市で水道あるいは下水道について調査、計画、助言などの活動をされ、さらに台湾においても同様の業績を残しております。しかし、日台12年間の滞在から帰国寸前に東京において病没しました。そのため、日本において優れた業績を残されたにも拘わらず本国ではその事実は殆ど知られていないようです。

本年はバルトン生誕150年にあたりますので、日本から感謝の意を英国に伝え、今後の友好親善をさらに発展させたいと願って「W. K. バルトン生誕150年記念事業」が企画されています。本会は、後援団体として協力しておりますが、記念事業の一環として「記念講演会」が開催されます。

記

主催：W. K. バルトン生誕150年記念事業企画実行委員会  
後援：厚生労働省、国土交通省(申請中)、環境省(申請中)、駐日英国大使館、スコットランド国際開発庁、社団法人日本水道協会、社団法人日本下水道協会、社団法人日本写真家協会、社団法人土木学会、NPO法人日本スコットランド協会、NPO法人日本下水道文化研究会  
日時：2006年5月13日(土) 午後1時～5時  
場所：東京都庭園美術館 新館大ホール及び小ホール

東京都港区白金台5-21-9

参加費：無料 募集人員：200名  
申込み期限：2006年4月25日(木)

### 記念講演会プログラム

#### 第1部 記念式

主催者挨拶

来賓挨拶

メッセージ：スコットランド側協力委員会

基調講演「わが国衛生工学の始祖バルトン」

東京大学名誉教授 藤田賢二

記念演奏：津軽三味線演奏

ケビン・メッツ(W・K・Burtonの玄孫)

鮎沢京吾(桐朋学園芸術大学専攻科)

#### 第2部 講演

「バルトンの夢～その生涯を訪ねて～」

大阪経済大学教授 稲場紀久雄

「日本近代化の中のお雇い教師W・K・バルトン」

名古屋大学教授 加藤詔士

「写真家バルトンが日本写真史に果たした役割」

東京都写真美術館専門調査員 写真史家 金子隆一

併催 資料展示(新館小ホール)

バルトン撮影による写真、曾孫鳥海幸子氏による絵画等が展示されます。

※申し込み方法等はおって本会ホームページなどでお知らせいたします。

## 第10回 日本下水道文化研究会 総会の知らせ

日本下水道文化研究会では平成18年度総会(第10回)を下記のとおり開催いたします。特定非営利活動法人認証を受けて以来7年目を迎えます。平成17年度は第8回下水道文化研究発表会を大阪で開催するとともに、2年度目を迎えた海外技術協力事業の成果も得られつつあります。また、し尿・下水分科会、関西支部の活動も非常に活発で、それぞれ新たな出版や水に関連するNGOとのネットワーク作りなどの成果があがっています。しかしながら、財政状況、活動の担い手など懸案の課題は十分な解決を見ないまま推移しております。

第9回総会同様、従来のように記念講演は行わず、本総会を分科会、支部の活動について会員の皆様へお伝えする

場として企画いたしました。諸活動の成果をお伝えし、忌憚のないご意見をいただく機会にしたいと思っております。万障お繰り合わせのうえご参集のほど、お願い申し上げます。

なお、やむを得ず参加いただけない会員の皆様は、委任状の提出をお願いします。4月下旬には総会議案書をお送りする予定ですので、よろしく願いいたします。

記

日時 平成18年5月20日(土) 13:30～15:00

場所 日本水道会館7階会議室

千代田区九段南4-8-9

※総会終了後懇親会を開催します。

## 第8回下水道文化研究発表会講演集 を販売しています

頒価は会員は1000円、非会員は1500円です。ご希望の方は、はがき、FAX、e-mailにて下記まで。

NPO法人日本下水道文化研究会 事務局〒162-0067 新宿区富久町6-5 NJS富久ビル別館3階

FAX: 03-5363-1129 e-mail: jade@jca.apc.org

## インド印象記（その1）

本会運営委員 高橋邦夫

JBIC（国際協力銀行）では毎年、円借款パートナーシップセミナーを実施している。その趣旨は、効果的・効率的な円借款事業の実施に際し、優れた知見と経験を持つ我が国の団体（地方自治体、大学等の学術研究機関、NGO等の民間非営利組織、民間企業等）との連携を図るため、こうした団体の円借款業務の理解の促進、JBICとの連携機会の発掘を目的としたものである。セミナーの内容は、現地視察前の国内研修会、現地視察、視察後の国内報告会である。平成14年度から実施され、今回は第4回目のセミナーとなり、現地視察はインドである。私の今回の幸運な参加の背景には、第2回目のセミナー（フィリピン）に参加した、本会運営委員の佐藤さんの推薦に負う。現地視察前の国内研修会は、平成17年12月、現地視察は平成18年1月15日～23日、視察後の国内報告会は2月であった。以下は、私のインド現地視察のメモ書きからの抜粋である。

## 16/JAN/2006：JBIC デリー事務所 地下鉄試乗

朝食前、連れの人 Fさんと共に散策に出かけた。夜明けはほぼ東京と同じく7時前後である。西の空に満月が残る。ニューデリーは、前世紀はじめ英国がコルカタから移転した首都である。7時過ぎの町はまだ閑散としている。路上生活者をよけ通行人に尋ねながら往く途中、巨大な青空市場に出くわした。全て、花・植物の取引市場である。ヒンズーのしきたりなのかどうか、花の装飾はいたるところで体験する。昨夜、空港への迎えのバスも含めて、多くの訪問地で大きなレイや花束の歓迎を受けた。

コンノート・プレイスは、大きなリング状の商店街である。砂埃と犬の糞が目につく街区には人影は少ない。そんな一面に最近開通したという地下鉄のターミナルがある。とんでもない広さを持つ瀟洒な空間が地下に有る。改札口にはチェックゲートが置かれ、手荷物検査がなされている。時刻は7時半を廻ったところである。まだ往来には混雑は無い。清潔で明るい地下道には規制のためか路上生活者はいない。

ホテルをバスで出発し JBIC デリー事務所へと向かう。当国における円借款事業は、当初の大規模工業・エネルギー施設など産業基盤投資から、道路、空港などに関わるアクセス基盤投資を経、次第に環境衛生など生活基盤・福祉向上などに関わる事業投資に変化してきているとのことである。さらに、今回視察の対象となる、Delhi の高速鉄道事業建設、Haryana 州の森林保全を基調とした貧困削減事業、バンガロールの上下水道事業、Agra 周辺を対象とした Yamuna river 流域改善事業などの説明を受けた。

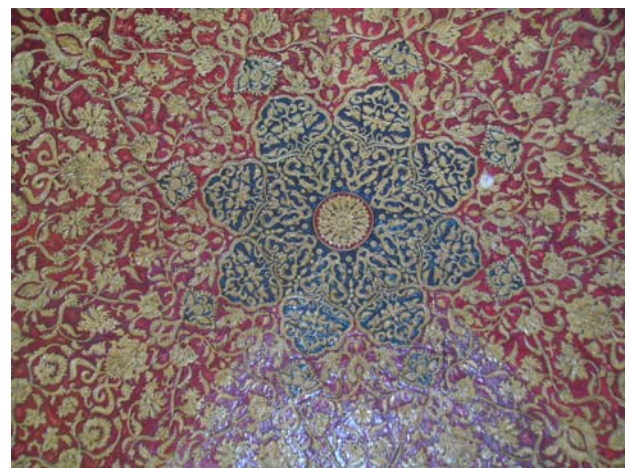
Delhi metro は、輸送力の向上、渋滞の緩和、安全性の向上、環境負荷の低減等を考慮した便益は投資に見合うことが示されていた。密集した都市部では軌道交通の威力は大きい。渋滞と排気ガスのダッカでも痛切に感じた次第である。日本から K 組・S 建設、M 重工がそれぞれ、建設、車両製作に参画した。ちなみに、初乗り料金は 6Rs、公共

輸送機関のバスが 4～6Rs とのことである。地元の NGO が年4回の事後調査を継続し、それらの評価を随時今後の運営に反映させているとのことである。建設に際しては、労働安全や周辺環境への影響に配慮し、また膨大な臨時労働者に対するエイズ対策なども綿密に行われたと聞く。この日午後、地下鉄に試乗したが、1.676m の超広軌軌道の車両は我々の感覚からすると 2 廻り大きく乗り心地は快適であった。乗客に運賃のことを聞いたが適切であるとの答えを得た。但し、乗り降りを見ていると、乗車先行であり、降車客は必死の思いで降りる覚悟がいそうである。今後地下鉄の延伸とトラムの導入なども視野にいたる整備をしていくらしい。説明役の K 組の N さんの顔が輝いていた。

この日の印象で付加しておくべき事は、昼食に誘われたアショカホテルロビーの天井装飾である。材質はわからないが、天井の凹面に描かれた象嵌細工？の絨毯模様は賞賛してあまりがある。



インディラ・ガンジー空港に到着した面々



アショカホテル・ロビー天井の装飾

## Bangladesh を訪れて

植松 京子

これまでバックパックを背負って 30ヶ国以上を旅行してきましたが、Bangladeshには、なかなか行けずに行きました。非常に少ない外国人旅行者は現地の人にとってエイリアン状態、外を歩くと数十の現地人に取り囲まれ、そのくせ言葉が通じないため、どこに行っても孤独で、移動するのも一苦勞。ムスリムの国であるため女性一人の宿泊を断る宿があるなど特に女性一人旅は難しい国。インドさえ清潔に思えるほど町は汚く、見所も特になし。というわけで、旅行経験のある友人からは、オススメできない、と言われていました。しかし3年前、大学の先輩である酒井先生、山村尊房さんと知り合ったのをきっかけにBangladeshとの縁ができ、とうとうこの2月に訪れることとなりました。

到着したその日、実際にこの目で見たBangladeshは、日本で得た情報から想像していたものと、かなり違っていました。首都Daccaにはコンクリートのビルが建ち並び、町中にそびえる新しい高層ショッピングセンターは、複数の電飾エレベーターに囲まれた吹き抜けホールを中心に、色とりどりのサリーや電化製品を売る百軒以上のお店が並び、多くのお洒落な人々で賑わっていました。きらびやかな装飾を施されたサリーの値段を見ると、日本円にして5万円以上。単なるディスプレイ用かと思いきや、絨毯張りの店内に腰を下ろして高価なサリーを手で店員と商談する女性もちらほら。数年前に出版された本に、Bangladeshは「最貧国」の一つと書かれていましたが、「NGO 大国」でもあるこの国は、そのNGOの努力の甲斐あって、ここ数年で、もはや貧困ではなくなったのかと思いました。

ところが別の日に町へ出ると、そこにはまた違った人々の姿がありました。渋滞で動けない大通りの車や三輪タクシーの間を縫って歩き、乗客に物乞いをする人々、瘦せた赤ちゃんを抱いた女性、少女の肩を借りて歩く盲目の女性、差し出す手の指が病気のために潰れている老人、ガム・地図・ポップコーンなどを売る幼い子供達。人通りの多い歩道には、もとの色がわからないほど汚れた衣服を纏い、身体に障害があるため、座って(または這って)瘦せた体で物乞いをする人々。(交通ルールがほとんど守られないこの国では交通事故が多発しますが、治療費を払えない貧しい負傷者は患部を切断するしかなく、そうした人々の多くは、仕事を得ることが困難となり、生きていくために物乞いせざるを得ないと聞きました。)夜遅くの路上脇には、コンクリートの上や、木で作った荷車の中で体を丸めて眠る人々。日本より人口の多いBangladeshで、国民の約4割が1日1US\$以下で生活していますが、極貧状態にある人は、スラムにさえ住めず、必然的に路上へと締め出されるといいます。

Bangladeshを含む多くの国には、21世紀のこの時代でも、最低限必要な衣食住さえ満たされず、それでも自分の運命を受け入れて生きる人達があります。一方、日本では、ほとんどの人達が物質的に満ち足りた暮らしをし、例え災害・事故に遭ったとしても、補償(ここ数年では「心の

ケア」さえ)を求め、得ることが当然のようになっていきます。国際協力をするうえで「自立の支援」が重要であるといえます。まさにそのとおりですが、私がBangladeshで見たような過酷な状況の中で、それでも一生懸命生きるほどの、自立する強い力を持つ人が、果たして日本にどれだけいるのでしょうか。日本の物質的に豊かな暮らしが、アジア諸国の安い労働力・輸出品によって成り立っているのだとすれば、自立を支援してもらっているのは、私達のほうなのかも知れません。というわけで、幸運にも、そして偶然にも、日本人として生まれることができた私は、この無条件で与えられた日本人としての特権を、何らかの形で貧困に苦しむ人達に還元したいと思っています。そうは言っても、これまで他の国で、本当に貧しい物乞いに小銭を出すことさえできなかった私は、出発前にマザーテレサの本を読みました。『もし貧しい人々が飢え死にするとしたら、それは神がその人達を愛していないからではなく、あなたが、そして私が、その人達にパンを、服を、そして愛を、思いやりを与えなかったからなのです。』心の準備の甲斐あってか、今回は、物乞いに小銭を、村の学校の子供達・農村の貧しい人達に日本から持参した文房具・古着を、渡すことができました。しかし、それしかできなかった私は、気が遠くなるほど大きな貧富の差・貧困層の人々の数を改めて目の当たりにし、自分の無力さを痛感してしまいました。それらは日本での慈善団体への寄付と違い、100%、本当に貧しい人達の手元に渡り、小銭は間違いなく、彼らが最も必要とするものに換えられるでしょう。しかし、お金やものを渡すことによる援助は、貧困問題の根本的な解決にはなりません。

そのように感じていた時に、技術的な援助によって、特に貧しい人々の健康を脅かし、時には貧富の差を更に広げる原因ともなる衛生状態(「ふくりゅう」43号 p.3参照)の改善に、着実につながりつつあるエコトイレを見学し、大変頼もしく感じました。(JADEの方々によくご存知のことと思いますが)このトイレは、トイレがない、または、



Bangladeshの子供たちと植松さん

あっても排泄物が垂れ流しのものが多い農村で、衛生改善の方法の1つとしてJADEにより提案された、し尿分離型のトイレです。トイレで得られた尿は随時希釈して、便は



エコトイレの尿で育てたキャベツを味見

き、プロジェクトを見学させていただきました。見学したトイレはデモンストレーション用ということで、所有者は全く費用を負担していないとのことでしたが、所有者の一人に「この効果を知った今なら、トイレに行くから支払えますか?」と尋ねたところ「サイクロンなどでトイレが壊れたら、今度は自分で同じものをもっと安くつくるだろう。し尿だって他の家の分も集めて使いたいくらいだ。」という意外な答えが返ってきました。アイデアはたくさん詰まっているけれど、現地の人が自力で作ろうと思えるくらいシンプルな造り、(イスラム圏では一般的にし尿の利用は忌避されるようですが)し尿への嫌悪感さえなくすほどの堆肥効果もあり。そして何より「壊れても、また欲しい」と思われるほどの人気ぶり。このトイレが一人でも多くの人々に普及し、バングラデシュの衛生状態、ひいては貧しい人々の生活が、少しずつでも改善されていくことを期待しています。

## 屎尿・下水研究会特別企画 「市原市・下水関連施設見学会」報告

平成18年2月28日(火)に千葉県市原市内にあります「下水関連施設」(公共下水道の処理場、屎尿処理場、農村集落排水の処理場)の見学会を企画しましたところ、21名の方の参加をみました。この中には、新聞予告や口コミによる一般参加者7名が含まれております。以下は見学した施設の概要です。

**市原市**：面積370平方kmで関東では横浜に次ぐ広さ。南北に36kmと細長く、北部は東京湾に面した平坦地で主に工場、商店街、果樹栽培地、中央部はなだらかな丘陵地で水田を中心とした田園地帯、南部は山林地帯で養老川が渓谷美をなしています。人口約27万人。かつて奈良時代には、上総国(かずさのくに)の国府が置かれたところで政治・文化の中心地でした。上総国分寺および尼寺の跡は国指定史跡となっており、特に尼寺跡には中門と回廊が復元され、「天平のいらか」を追体験することができます。

主な見学施設：

### ①臨海衛生工場(屎尿および浄化槽汚泥を処理)

運転開始：昭和41年

処理能力：屎尿65kl/日、浄化槽汚泥230kl/日

処理方式：

屎尿処理系：標準脱窒素処理(2段活性汚泥法)＋凝集沈殿処理(高度処理)＋汚泥処理

浄化槽汚泥系：前ばっ気＋固液分離(脱水)

希釈水：下水二次処理水を利用(930m<sup>3</sup>/日)脱臭設備：酸、アルカリ洗浄方式

放流水域：養老川

放流水域：養老川

### ②松ヶ島終末処理場(下水を処理)

運転開始：昭和57年

処理能力：約53,000m<sup>3</sup>/日

処理方式：標準活性汚泥法(約32,000m<sup>3</sup>/日)

硝化化促進型嫌気・無酸素・好気法(高度処理)(約21,000m<sup>3</sup>/日)

汚泥処理(脱水機、焼却炉)

放流水域：東京湾

### ③月崎浄化センター(農業集落排水の処理。施設の基準は浄化槽に準じている。)

計画汚水量：約150m<sup>3</sup>/日

計画処理人口：550人

処理方式：回分式活性汚泥法。無人自動運転。

放流水域：養老川

### ④運河の干満を利用した雨水排水調整施設

雨天時において、干潮時に水門を閉め運河を低水位にし雨水排水を貯め、次の引き潮に合わせて水門を開けて貯留した雨水を排水する。ポンプ場は建設中。

今回、三つの下水関連施設をマイクロバスの利用で、効率的に一挙に見学することができました。なお、本見学の実施に際しては、地元の菅家啓一さんの多大なご尽力を得ましたことを申し添えます。

(運営委員 地田修一)



見学会に参加された皆さん

## 第40回 屎尿・下水研究会例会「トイレマナーから見るトイレ文化」報告

平成18年3月17日(金)、東京・飯田橋の東京ボランティア・市民活動センターで「第40回屎尿・下水研究会例会」が開かれました。演題は「トイレマナーから見るトイレ文化」で、関野勉氏(本会会員)が10年来温めていたテーマです。最近、新聞各紙がトイレのマナーについての記事を相次いで載せるようになったことに触発され、改めて調べ直してみたとのことです。キリスト教の旧約・新約聖書、インド・ヒンズー教のマヌ法典、イスラム教の伝承集成であるハディース、仏教の正法眼蔵などの教典や、水洗トイレのはしりの頃のトイレマナーに関する文言を拾い集めた上での講話であり、長年の蘊蓄を傾けたものでした。以下にその骨子を紹介します。

- ① 旧約聖書の申命記に、「用を足す時、武器と共に鋤を備え外に出て、かがむ時、それをもって土を掘り向きをかえて、出たものを覆わなければならない」とある。
- ② 新約聖書のマタイ伝に、「なんじらも今もなお悟りなきか、凡そ口に入るものは腹にゆき、遂に廁に棄てられる事を悟らぬか」とある。
- ③ マヌ法典に、「決して、風、火、ブラーフマナ、太陽、水あるいは牛を見ながら大小便を排泄してはならない」とある。
- ④ ハディースは、預言者ムハンマドの語った言葉として「廁に清めの水を置くこと。水で洗うこと。右手で洗うことの禁止」を伝えている。また、イスラムの排泄の心得として、「排泄の時、体の前面がメッカに向いたり、背を向けたりしてはならない」がある。
- ⑤ 正法眼蔵に、「用を足した後は、竹のへらを使えばよ

い。また、紙を用いることもあるが、ほご紙、文字の書いてある紙はいけない」とある。

- ⑥ 「ビルデング読本」には、水洗化トイレの黎明期を反映して事細かな注意事項が列挙されている。例えば、「腰掛け式の大便秘器には、入り口の方を向いて必ず腰をかけること」、「大便秘器の中には、大便秘器の紙以外に何も棄てぬこと」など。
- ⑦ 第二次大戦中の昭和18年に書かれた「しつけの科学」に「朝起きたら、直ちに小用ばかりでなく用便をする」、「便所の草履下駄は、後から行く人のはきのようにそろえること」などと、便所の使い方が載っている。
- ⑧ 戦後、水洗化トイレをきれいに保つため日高家では、こんな張り紙をトイレにしたそうです(「エチケツト」日高夫妻著、昭和33年刊)。「御使用後は、かならず水をたくさん流してください。水が美しく澄むまで、落ちていて根気よく流してください。紙は、備えつけた紙を使い、それ以外のものは便器に流さないで、かならずうしろにある器の中に入れてください。おたがいに気をつけて、便所を美しくたもってください。日高艶子」。

昨今は、水洗化トイレが普及し目の前から汚物が見えなくなることで、事足りりとしているが、このようなトイレマナーの多様性を考えるとき、そこに文化の違いの奥深さを感じざるを得ません。

(運営委員 地田修一)

## 第8回下水文化研究発表会座長報告(続き)

## セッションIV「下水文化研究」

座長：大東文化大学 谷口 孚幸

本セッションでは6題の報告が行われた。

『1. 下水道使用量制度形成史論と現段階』は、下水道使用料制度が形成される歴史的過程を検討し、「公共性と私的性を調和させた的確な経営体制とは如何なるものか」という課題にアプローチしたものである。現段階が転換点として極めて重要な位置を占めていることを指摘し、新たな経営体制を提案している。経済学(環境経済)に於いておおいに論議されている「公共論」を論じている。

『2. 京都市水共生プランと京都市下水道事業』は、京都市水共生プラン及び京都市下水道マスタープランに基づいて展開している京都市の下水道事業を紹介している。その基本的視点は「私たちの手でみずみずしい都市のくらしと再生を！」であり、行政と住民、NPO、事業者の4セクターの連携・協働の必要性を論じ、下水道事業の推進主体を住民とし、行政のサポートと情報公開の一層の強化を主張している。地球環境時代にふさわしい都市計画と密接にリンクした水環境整備プランである。

『3. 兵庫県の流域下水道における高度処理の推進について』は、兵庫県の流域下水道の6つの浄化センターのう

ち(財)兵庫県下水道公社が維持管理をしている5つの処理場に導入されているステップ式流入多段階硝化脱窒素法とその放流水質が紹介された。日本下水道事業団開発技術のさらなる実践的 pursuit の成果であり、基準のきびしい瀬戸内エリアに位置する自治体の精緻な実証試験として高く評価される。

『4. 下水処理水を活用した流域が一体となった河川水環境改善への取り組み事例』は、埼玉県下の不老川(荒川右岸、流域面積5,660ha、17kmの一級河川)流域市町の関係する部局が住民と一体となって、水環境改善に取り組んでいる事例である。川底が見えること、メダカやシオカラトンボの幼虫を含めた生物の生息などを目標としている。今後の取り組みで重要なものとして、住民の熱意の向上をはかるため、一層の水環境啓発活動の必要性を主張している。今後、実測データの入手と解析が期待される。

『5. 大阪府に於ける下水再生水のせせらぎ利用』は、処理水の有効利用率を2010年度末までに約30%とすることを目標とした「21世紀の大阪府下水道整備基本計画(ROSE PLAN)」を策定している大阪府が取組んできた下水処理水有効利用の紹介である。発表では、せせらぎ利用のうち「東大阪市鴻池水路」及び、現在事業中である「大東市御領水路」について、多くのフォトを用いて紹介した。再生水によって都市アメニティの向上に寄与する分野を

切り開いたものとして評価される。

『6. 保水型都市の構築へ向けて』は、従来、排水することが主目的であった我国の都市雨水管理は、都市構造の変化に伴う水環境の変化、例えば①水循環の加速化、②保水力の低下、③それによる都市気象の変化、④都市型水害の多発等をもたらしていることを指摘している。その対応としてオンサイト型対策を加えたハイブリッド型の雨水管理を提案し、その様なインフラを具備した都市を「保水型都市」と呼んでいる。その運用には都市生活者自らの主

体的な行動を組み込んだ「保水型都市マスタープラン」が必要であると主張する。東京雨水国際会議に分科会として参加し、新しい都市のコンセプトと具体策を示した力作である。

6点中5点は、市民参加、官民共働がテーマに含まれていたのは近年の傾向の1つとして理解できる。以上6点共に将来展望が出来、更に社会への貢献が期待できる優秀なものであった事を申し添える。

### ホームページをリニューアルしました

運営委員会では、かねてより本会のホームページを刷新・充実し、会の活動状況を迅速に皆様方にお伝えするとともに、会員相互の情報交換の場にしたいと考えておりましたが、この度、会員の小松建司氏（元運営委員）の協力を得、3月15日よりホームページをリニューアルしました。今後は、各種企画の予告案内およびその結果報告にとどまらず、ホームページを通じて会員の皆様からの情報をも掲載するなど双方向からの情報を共有できるように、改善を図っていきたく考えています。忌憚のないアドバイスをお願いいたします。

ホームページに関するご意見あるいは情報提供などがございましたら、小松建司氏（メールアドレス dhki501\_1@yahoo.co.jp or dhki501\_1@hotmail.co.jp）までご連絡ください。

なお、情報提供につきましては、できるだけ電子化したものをメールに添付していただくか、または、データをCD、MO、DVD化したものを研究会の事務局宛郵送していただければ幸いです。

### 2006年多摩川源流まつりのご案内

5月4日恒例の多摩川源流まつりが奥多摩の山梨県小菅村主催により行われますが、日本下水文化研究会では、下記の要領で参加いたします。翌日は、都民の水道水源である笠取山の水干（みずひ）まで、おにぎりをもって軽いハイキング（登り約2時間）を行う予定です。老若男女の皆さん、ふるってご参加ください。

見処：長作観音、白糸の滝、雄滝、郷土太鼓、お松炊き、小菅の湯、おいらん淵など

記	費用
日時 平成18年5月4日～5日（1泊2日）	男性 9,000 円、女性 8,000 円、子供 5,000 円 （1泊2食、交通費とも）
集合 JR八王子駅北口タクシー乗り場、4日午前10時	お問合せ・申込み 齋藤博康氏まで 4月20日締切り
解散 同所5日午後6時（予定）	ご要望などもお申し付けください。
宿 小菅村 山水（ヤマズ）館 TEL 0428-87-0533	（自宅 TEL 03-3657-8676）

#### 運営委員会・事務局より

- 本会報とともに平成18年度の会費振込用紙を同封しますので、早急に納入いただきますようお願い申し上げます。依然、未納の会費は少なくありません。ご承知のことと存じますが、会の運営は会費収入によって成り立っております。未納会費の縮減にご協力ください。
- 会費の納入に際しまして、昨年同様寄付金を募らせていただきます。平成17年度、この寄付金は海外技術協力事業ばかりでなく、研究発表会などにも役立させていただきました。
- 総会では今年も活動状況をより詳しくご報告し、本会活動を支援していただいている会員各位への説明責任に努めたいと考えています。どうかふるってご参加ください。
- 3月25日海外活動（エコトイレによる衛生改善プロジェクト）報告会を開催いたしました。住民の衛生意識の変化、尿尿分離した尿のもつ施肥効果、乾燥した便の疫学検査結果などが報告され、今後の活動の方向性についても参加者から貴重なコメントをいただき、有意義な議論ができました。2年度目の活動報告書も間もなくできあがりますので、ご希望の方は会までご連絡ください（有料）。

編集後記 バングラデシュの2年度目の活動サイトで供用開始前ワークショップの際に、「なぜこんなところでボランティアで活動しているのか」と住民から問われた。▶協力できる技術や知恵があって、それが受け入れられるとわかったときの喜びは大きい。受け入れに至るプロセスで経験した苦労や新たにヒューマンネットワークが生まれれば喜びはひとしおである。▶これは広くNPO活動に共通するものであろう。（酒井 彰）

#### ふくりゅう 通巻46号目次

バルトン生誕150年記念国内事業のご案内 第9回日本下水文化研究会総会のご案内	1
インド印象記（その1）	2
バングラデシュを訪れて	3
尿尿・下水研究会特別企画報告	4
第40回尿尿・下水研究会例会報告 第8回下水文化研究発表会（座長報告（続き））	5

#### 特定非営利活動法人 日本下水文化研究会

〒162-0067 新宿区富久町6-5 NJS富久ビル別館3F  
TEL & FAX 03-5363-1129 e-mail: jade@jca.apc.org

「ふくりゅう」では、原稿募集をしております。「水」について思うこと、身近な話題、会に対するご意見やご提案、どのようなことでも結構ですから事務局までお送りください。

#### ホームページもご覧ください

<http://www.jca.apc.org/jade/index.htm>  
関西支部 <http://www1.kcn.ne.jp/~k-atsumi/>